

井沢元彦

トラップアンドエラー



井沢元彦

風社出版

トラップ・アート・エラー



山岡莊八 傑作時代長編

柳生一族

戦国乱世の中、天下を掌握した智将・家康と劍禪一如、無刀取りの秘法を会得する石舟斎の対決を描き切る

山岡莊八 傑作時代大長編

柳生三太狗

戦乱を勝取り、泰平を生き抜き、陰に徹するが柳生家の意地。徳川三代を支える柳生の兄弟小太狗の大活躍

山岡莊八 傑作時代大長編

あばれ公子

徳川家の行末を案じ三代將軍の決定に苦悩する家康と、家光の養育に將軍家の安泰を願う柳生宗矩の活躍!!

目次

トラップアンドエラー	5
葬られたエンジェル	64
海賊聴取者の死	117
闇夜のカラス	156
二つのトランク	202
炎の花の女	239

装帧
吉村直樹

トラップ
アンド
エラー

トラップ アンド エラー

A 殺意^{インテント}

黒田讓次を殺したい——それが最近の私の念願である。

私、西村浩はある地方銀行の東京支店に勤める一介のサラリーマンである。

支店といっても、東京支店は一応のエリートコースで、ここを卒業して本店の昇進コースに乗った人間は少なくない。私も、幸いにして上役の覚えめでたく、今年の末には常務の令嬢と結婚することになっている。重役連はすべて銀行を支配する一族で固められているから、結婚はその一員に迎えられることでもある。将来は保証されているといっている。

バラ色の人生だって？ 基本的にはそうだ。あの黒田というダニがいなければ最高なのだが。

私は、その日、月に一度の黒田との面談のため、昼休みに近くの喫茶店へ出かけた。

黒田は派手なチェックのブレザー、紺のズボンにコンビの靴、それに黒のサングラスといった、いつもの趣味の悪い姿で奥のボックスにふんぞりかえっていた。

私は仏頂面で黒田の前に座ると、愛想のないウェイトレスにコーヒートを注文した。

黒田は私の様子にニヤニヤしながら、黙って右手を差し出した。

私は内ポケットから封筒を取り出すと黒田に渡した。

黒田は封筒を片手で丸めて中をのぞき込むと、人を小馬鹿にするような笑いを浮かべ、

「確かに——」

と言って封筒をポケットにしまった。

封筒には10万円入っている。

私にとっては大変な金だ。毎月の労働の汗の結晶がこの最低の男に半分近く持っていられる。そしてボーナス月には30万円の金が黒田のふところに入ってしまう。

「じゃ、これで」

まずいコーヒを一口すすただけで、私は伝票を握んだ。こんな男と長く同席するつもりはない。

「まあ、待ちなよ」

黒田はその日に限って、私をひきとめた。

私は嫌な予感がした。

「何だ、まだ用があるのか？」

座りなおすと、私は言った。

「来月中に800万欲しい」

黒田は珍しく真剣な顔で言った。

「800万、無茶言うな」

私は驚いて言った。

毎月、10万の負担にあえいでいる私に、そんな金がある筈がない。

「とにかく800万いるんだ。都合してくれ」

黒田は重ねて言った。

「おい、冗談言うなよ」

と、私は声が大きくなりそうになるのを必死にこらえて説得した。

「君には、毎月10万、ボーナス時には30万ちゃんと支払ってる。これが約束だったじゃないか」

「そう、これまではな。——だが事情が変わったんだ。どうしても800万いる。それが無いと、俺は命が危ねえんだ」

「一体、何に使うんだ、そんな金？」

「……………」

黒田は初めてバツの悪そうな顔になった。

「そんな金を出せない。第一、無い袖はふれないじゃないか」

「800万だぜ。俺は何も5000万とか、一億とか言ってるんじゃない。ただの800万だ。それぐらい何とかなるだろう。家を建てるとか何とか言って借りりゃあいい」

「そんなことができるか！ 僕は君に約束以上の金を払うつもりはない」

「そうか、それなら、こちらにも考えがある」

「おい、まさか」

「そうだよ、全部バラしてやる。お前さんの出世も何もかもパーだよな。——それでもいいのか」
サングラスをはずして睨みつけてきた黒田の視線に、私は身震いした。

破滅——そう破滅だ。もし、黒田があのことをバラせば。

「いいか、ただの800万だ。工面できない金じゃ無い筈だぜ、とにかく用意してもらおう。期限は来月の15日だ」

なだめるような調子で黒田は言った。

「——一体、どうしてそんな金があるんだ」

うめくような声で私は言った。

「ちょっとした小バクチに手を出しちゃってな。——借金を作っちゃったんだ。金を出さないと、あいつら何をするかわからん」

「小バクチ？ 800万もスったのに？」

私の眩きに、黒田はせせら笑うと、

「まだマシな方さ。中には一億も負けた会社の社長もいるんだぜ。まあ、俺も、もうちょっとうまいけば1000万ぐらいいはもうかったんだがな」
と言って、さらに念を押した。

「わかったな。来月の15日までだ」

私はとにかく頷く他はなかった。

私と黒田は城南大学経済学部同期生である。奴と知り合ったのは3年の小淵ゼミの初顔合わせの時である。

田舎から都心の城南大に進学し、下宿生活をおくるようになった私だが、黒田と知り合うまでは、真面目一方の学生生活だった。

黒田は東京都下にあるかなり大きな造り酒屋の息子で、父親に買ってもらった赤いスポーツカーを乗りまわしていた。私は、どういうわけか黒田と親しく付き合うようになった。多分、奴の不良っばさにあこがれたのだろう。今から思えば馬鹿な話だが、当時の私は奴の腰ぎんちゃくのようなものだった。

麻雀、花札、ビリヤードといったゲームや、サーフィン、スキーといったスポーツなども、私は奴の手ほどきを受けたものだ。奴にしてみれば、私を使いやすい子分のように思っていただろうし、私の態度にも奴にそう思わせる要素があったことは否定しない。

だが、それがいけなかった。

結局は私の人生を狂わせるものになったのだ。

4年の夏のことだった。

私は奴の車に乗って夏の軽井沢に向った。

そこには奴の一族が経営するホテルがあり、正直言つて、我々の目的はガールハントだった。

2日目の獲物は江本夕起子という女子学生だった。

某有名女子大出身の彼女は、すらりとした肢体をテニスウェアに包み、いかにも遊び慣れた印象を与えた。

黒田は例によって言葉たくみに近付き、車に乗せることに成功した。

獲物が一人の時は黒田に任せるのが、二人の間の暗黙の協定だった。

人のいない森の近くで車を停めて、黒田は夕起子を誘って茂みの中に入った。私は車の中で留守番をしていた。

損な役回りだが、スポンサーが黒田なのだから仕方がない。私はカーラジオで甲子園の高校野球を聞いていた。

突然、悲鳴が聞こえた。

私はラジオのスイッチを切ると、車の外へ飛び出した。

茂みの中から、スキャンティ一枚の夕起子が走り出してきた。その後を血相を変えた黒田が追っかけていた。

「おい、つかまえるんだ。早く」

黒田が叫んだ。

私はあわてて夕起子に飛びついた。

ポリariumのある乳房の感触が感じられたと思うと、夕起子は、大声で悲鳴をあげてもがいた。

黒田は駆け寄ってくると、ハンカチを取り出し、丸めて夕起子の口に突っ込み、その場に押し倒した。

「いいか、しっかり押さえてるんだ」

黒田の命令に、私は気押されたように従った。自分のやっていることは犯罪になるのかもしれない——という意識は確かにあった。

しかし、思いがけぬ事の成り行くと、目の前に示されたまぶしいまでの肢体が、私の判断を狂わせた。

黒田と私は、夕起子をかわるがわる犯してしまった。

すべてが終ったあと、うつろな眼でぼうぜんとしている夕起子に服を着せ、車に乗せて町の中まで送り届けた。

夕起子はその間中、一言も口をきかなかった。

夕起子が雲の上を歩くような足取りで去っていった時、私は黒田に呟くように言った。

「あの女、大丈夫かな？」

黒田はもう女のことを忘れたかのように、鼻で笑うと、

「——しぶといもんさ、女は。明日はけろっと忘れてテニスでもしてるだろう」

と頭をかきながら言った。

「そんなもんかな」

私はなんとなく安心した。

正直言つて、夕起子が自分たちを訴えるのではないか——という恐怖が頭の隅にあったのだが、黒田の平然とした態度を目のあたりにすると、気分が落ち着いてくるのが妙だった。

だが、奴の予想は大きくはずれた。

夕起子はその晩ガスで、自殺してしまったのだ。

翌日の新聞記事で、私は夕起子が製鉄業界の大立物の一人娘だと知った。

その後の展開はまるで悪夢のようだった。

娘は遺書を残していた。名指しこそしていなかったものの、暗に犯されたのが自殺する原因だとはめかしていた。

父親は激怒したものの、初めは真相を隠しておくつもりだったらしいが、週刊誌にすっぱ抜かれたのを契機に、あえて『公開捜査』に踏み切ったのだ。

この件に関しては警察も異常な関心を示していた。単なる強姦なら親告罪（被害者が告訴しないと成立しない罪）だが、輪姦なら話が違ってくる。それに社会的反響も大きい。

よく捕まらなかったものだと私は今でも冷汗をかくことがある。

黒田と私は幸いにもと言おうか、悪運強くと言おうか、ついに逃げおおせた——といっても7年の公訴時効が成立したわけではないが。

だが、社会に出た黒田にはこの幸運がマイナスに働いた。私はもう二度と悪事なぞするもんじやないとい心に命じたのだが、黒田は警察や社会というものに対してタカをくくるようになった。父親のコ

ネで入った信用金庫で奴は経理に大きな穴をあけた。5000万円近くも着服したのだ。父親が全額弁済したことで刑は軽くなったものの、やはり実刑は免がれず、刑務所で服役していた。出所した奴は親類から義絶されたため、私を頼ってやってきた。

私はその時から金をゆすられる破目に陥ったのだ。

黒田は私から細く長く取り立てる方針を刑務所で決めたのだろう。

むしろバレなかったことは黒田に幸いしたようだ。「前科者」という強い立場に立った奴は、もう刑務所に入ることには恐れていない。あのこと、ことをバラせば、下手をすると奴も手が後ろに回るのだが、奴はそんなことは気にしない。平然として、月に一回、私から金を巻き上げる。

犯罪自体はあと数年で時効だし、仮に捕まっても証拠不充分ということもありうる。

しかし、それでもこちらは開き直るわけにはいかない。

信用第一の銀行員がそんなことをしたとわかれれば、まちがいはなくクビは飛ぶし、夕起子の父親も黙ってはいないだろう。いずれにせよ私の生殺与奪の権は奴に握られているのである。

これまでは、奴を殺そうという気はなかった。

腹の立つことだが、月々ちゃんと金を払っていれば一応は波風は立たないのだから。

しかし、これからはそうもいかない。

この前も婚約者の文子から、貯金がまったく無いのを非難されたばかりだ。

その時は何とかごまかしたものの、結婚生活に入れば、使途不明金が多過ぎると疑惑を持たれることになる。

そのうえ800万だと！

冗談じゃない。そんな金を出せるもんか。

挙式や新居の費用だっているんだ。

それに奴の性格から見て、800万円都合すれば済むというものではないだろう。

金を渡せば、味をしめて再び同じようなバクチに手を出しかねない。学生時代から金には実にだらしない男なのだ。

殺意——それが芽生えたとしても当然だろう。

奴は私の人生のガンなのだ。

早く切除しなければ全身に転移して、死ぬことになる。

こうなったら食うか食われるかだ。

たとえ私が銀行を辞めたところで、奴はあくまでつきまとってくるに違いない。

どうしたって殺すしかない。

このままエリートコースに乗るか、犯罪者の烙印を押されて社会的に抹殺されるか、いうまでもなく道は一つだ。

黒田をいかにしてうまく殺すか。

これが私の念願だ。

そして一日中そのことを考える日が何日も続いたのである。